やはり、拘り、発信し続けてみるもの

以前に、HP「この本との出会いは、恩師の導きか‥‥（バックナンバー書籍等読後感関係 P、2004.4.3.：参照）で触れた「証言・ハンセン病　もう、うつむかない」を読んだ時から、昔見た映画「砂の器（1974 公開）」をもう一度見たくなっていた。

特に、後半の主人公が作曲した楽曲「宿命」のオーケストラとピアノ演奏を BGM に、四季の美しい景色を背景に、父子の放浪せざるをえなかった道行きの３０分近い様子が、強く印象に残っていた。美しい景色が背景だけに、迫害、疎外、差別故の父子の哀れさ、悲惨さ、悲しさが、映像として描かれていたからかも知れない。

この映画のビデオ版を求めて、ネット検索したし、ビデオ店、貸しビデオ店を私も放浪して探したが、見つけられなかった。ビデオ化されていなのかなあと思いつつも、機会ある毎に、「どこかの店で見かけたことない？」と、知人、友人に尋ねてもいた。

さにあらん、ついに知人が、「あったよ！」とわざわざ DVD を購入して貸してくださった。もちろん、早速見た。昔の感動に違（あた）わず、やはり後半部分には、釘付けとなった。

知人に感謝するのはもちろんのこと、やはり何事も、諦めずに拘り続け、厚かましくても周りに発信し続けていると、輔けてくれる人が現れることを、今回も味あせていただいた。

（2204 年 12 月 25 日　記）